

# 【人法一箇】と【師弟一箇】

【人法一箇】と【師弟一箇】は仏法の基軸となる重要な意味を表現していますので、難しく、少し長い説明になりますが、最後までついて来てください。最後まで読んで考えて頂くと、必ず両眼からウロコが何枚も落ちると思います。

三世にわたる森羅万象の全ての生命の存在は法の道理を基に生老病死の営みが有るのですから、元々全ての生命は人と法と一体の【人法一箇】であり、法から離れての生命の存在は有り得ないのであります。例えば私達の生命は、誕生する前から生命の終焉まで、引力と水分と空気と栄養等々に支えられて生きているのであります。これらの地球では基軸となる法に叶ってこそ生まれ生きて行く事が出来るのであります。一度でも数分でも呼吸を止め、血液の循環が梗塞を起こせば生きる事が瞬時に出来なくなってしまうのであります。

で、ありながら、人間は自分の力で生きているんだ、自分が得た認識、知恵が一番正しいと思ひ込む煩惱と、感情によって、人と法は別々のもので、我こそが中心の法だと錯覚、錯乱している代表が凡夫人間なのであります。動物植物等の人間以外の生命は、自然に逆らう事無く、あるがままに一体となって生きて行かなければならない存在であります。人間は天候が不順だ、異常気象だと人間を中心にして言いますが、人間を中心にして異常と感じていますが、異常ではなく自然なのであります。自然の中で生かされている人間が、人間が自然をコントロール出来るかのように異常な錯覚が正常の様におもいこまれてしまっているのであります。

仏も、元々凡夫として存在ですが、他の凡夫より抜きん出た真理の探究心を抱き、努力思索の挙句に、凡夫の錯覚と錯乱を突き破り、諸法の実相である真実の法を悟り、全ての生命の要となっている南無妙法蓮華經の法の覚者として、全ての生命の存在は【人法一箇】である事に気付き目覚め、仏になったのであります。その上で自分が悟れたと同じ様に、一切衆生がこの法に目覚め悟り、凡夫が自信満々で真実であると錯覚、錯乱して見ているものは方便である事に目覚めるように説き、一切衆生が平等に成仏出来る様に導く使命と責任を自らに課したのであります。

日蓮正宗では、【人法一箇】と【師弟一箇】は日蓮大聖人の法を信仰する要の柱として、常用する言葉であります。各宗にまたがる一般基本仏教用語の辞書には記載されていない

日蓮正宗だけが多用する語句なのであります。

ならば、この二つの言葉は、我田引水、我利我利の日蓮正宗の造語かといえば、そうではなく、二つの言葉には明確な仏法の基本目的である【成仏】を凝縮し表現する不可欠な要素があるのであります。逆説的に言えば、他宗多門でこの意味を含有している、この言葉を示さずして、仏教の根本目的である成仏を、ただ阿弥陀如来に任せる、大日如来に任せるという丸投げで、その仏は如何なる法に依って一切衆生を成仏せしめるのかが示されていないような宗教は、宗教で無く、そこに成仏の法は無いという事になるのであります。仏法は縁起でありますから、丸投げで縁起を踏まえないものは仏教を名乗っていても仏教では無いのであります。

【人法一箇】と【師弟一箇】を別々に説明するよりは、二つは不離の関係にありますので、別々の説明にしないで【人法一箇】と【師弟一箇】の順序で一括に説明をし、その関連を明かしたいと思います。

【人法一箇】とは、人と法が一体化する成仏を表現しています。

【師弟一箇】とは、師（人法一箇し成仏した）と弟子が法華経の行者として一体化し、師から弟子へ一切衆生成仏の法を説き伝え、師弟が共に南無妙法蓮華経の仏性を確認自覚し成仏する事をする事を表現しています。

はじめに、【人法一箇】から説明します。

【人法一箇】の【人】とは我々凡夫人間の事であります。仏を含め、この世の中に存在する生命は全て十界互具の凡夫、人間なのであります。

その前提として、まず、数々の宗教というものが、どうして世の中に派生して来たのかという事の基本的概念を述べようと思います。

全ての諸仏は、元々全て普通の迷いを持った我々と同じ凡夫でありました。

その日その日の食糧獲得と子孫繁栄が存在の目的の全てである森羅万象全ての動植物の生命の中で、その凡夫が、人間は何の為に生まれて来たのか？何の為に生きるのか？何故生老

病死が有るのか？産まれて来る前の過去は何だったのか？死んだら未来どうなるのか？人間の生命、森羅万象全ての生命は何なのか？という事を、人間だけが考え、多くの人に知恵を伝播し共有し、生きていた時に培った知識智慧を知的財産、知的遺産として遺し次の世代に継承し発展させて行く知的欲求を持ち、その為に言葉、文字を産み出し互いに進化共有出来る知恵に優れていた為に、その智慧が熟成するに従い、食料獲得と子孫繁栄、民族繁栄も大事だが、産まれて来た子供が、死んだ両親、祖父母に似て産まれて来る。産まれて来る前の生命、死んでからの生命は、どうなっているのだろうか。人間は何の為に、何をやる為に産まれて来たのか、生命とは何なのかとの根源的疑問を抱き、人間しか持つ事の無い知的探求をしようと、考えた結果、この世の中に、生命と向き会おうとする、数々の宗教が誕生したのであります。

それ等の宗教の内容を大別すると、

①には、天地創造の神を立て、人間がどんなに考えても、世の中には分からない事が多すぎる、分からない不思議な事は、人間がどれだけ考えても分からないのだから、特別な存在である、眼に見えない神がこの世の中を造ってくれたという事にしようと、自分達で考える事を放棄し、神に丸投げし、神の思召すままに神が造ってくれた神の子として生きて行こう。というイスラム教ユダヤ教キリスト教エホバの証人日本神道の様な天地創造の思考に立つ宗教が起きたのであります。しかしながら、仏教であっても、阿弥陀如来、大日如来、釈迦如来等々の仏に全てお任せしますという丸投げの宗教は、天地創造の宗教と同じ丸投げ思考のものであります。仏教系であれば、何宗であろうと、教えのプロセス、構造、内容も同じだと考えるのは間違いであり、仏教だからこう、神だからこうと単純な一括りには出来ないのであります。

②には、一切衆生成仏を無上の目的に定め。この世の中の一切の生命は、神の様な仏の様な誰か特別な存在が造ったものではなく、神の様な仏の様な特別な存在に丸投げにして、自分が探究する事を他力本願として放棄せず、森羅万象全ての生命、事象には、必ず根本となる道理（法）が平等に貫かれていて、その道理（法）を悟る事（目覚める）によって、永遠常住の生命を自覚し、現世の生老病死の苦悩から解脱する事が出来る。誰もが仏に成る資格を平等に持っている。つまり、神や仏に任せるのではなく、神に象徴される法（道理）、仏に助けて下さい、救って下さい、守って下さいと、すがりついていても、仏が悟った法を得る事は出来ず、成仏は出来ないのであります。仏が悟った法を信受し一体になった時、悪心、迷心を持った凡夫であっても、一切諸仏と同等に仏に成る事が出来る。つまり、成仏する事が

出来るという宗教であります。

この二つの思考構造の違う宗教が人間の智慧の精華としてこの世の中に生み出されたのであります。

※仏教を哲学と言う人々がありますが、ギリシャ語の【愛・智】を西周が【哲学】と訳しました。愛智とは認識、倫理、存在、美学等々に分類される、人間の人生観、世界観、価値観、思想等々であり、現世だけの人間の行動心理を探究するもので、宗教の様に過去世、現世、未来世の三世に渡って生命を考えることはしませんし、逆に哲学は、三世の生命観を非科学的な事として、否定排斥するものであります。ですから、仏教哲学などと言うと深遠そうでシャレているという思い込み、哲学と表現をする人々がありますが、全く分かっていな愚かさを自ら証明しているものであります。

仏教全般に共通共有している基本戒に【五戒】があります。

A不殺生戒、B不偷盜戒、C不妄語戒、D不邪淫戒、E不飲酒戒を言います。つまり、殺してはいけない、盗んではいけない、嘘をついてはいけない、他人の連れ合いに恋愛感情行為を持つてはいけない、酒を飲んで人に迷惑を掛けてはいけない。というものであり、現代各国の法律の根幹になっているものであります。つまり、仏教は、人間は一人で生きているのではなく、一人では生きて行けない。全ての生命の繋がりによって生きているのだから、人間関係の信頼と安全の為にはルールを守らなければいけない。生きるという事は他の生命と共生する事を絶対的前提にしているものであります。哲学に、このような【五戒】があるでしょうか？個々人の現世だけの【人間いかに生きるべきか】という自問自答が有っても、社会あつての自分という全ての生命との繋がり、三世の生命の繋がりの中に自分の人生が有るんだと説く仏教の教えの方が、遙かに【人間いかに生きるべきか】を表しているものであります。

仏教の目的は成仏であります。

森羅万象全ての生命に仏の生命が元々具わり、どの生命も平等に仏に成る事が出来る。これが一切の仏が凡夫の時に修行して悟って仏と成り、自分が悟った一切衆生成仏の法を一切衆生に説き伝える事が仏としての責任であり使命なのであります。

という事は、成仏とは【人法一箇】という事なのであります。

法華経の法師品第十（開結391p）

若しは経巻所住の処には、皆応に七宝の塔を起てて、極めて高広巖飾ならしむべし。復、舍利を安んずることを須いず。所以は何ん。此の中には、已に如来の全身有す。

と示されています。経巻・此の中とは法華経の法、妙法蓮華経であります。如来の全身とは、人間として妙法蓮華経を悟った仏であります。妙法蓮華経の法の中に仏の全身が有る。つまり、全ての仏の悟った中味の法は妙法蓮華経の法なのであります。

※日蓮正宗では亡くなった人の成仏を願い建立する御塔婆の一番上に妙法蓮華経、その下に二行に【此中已有 如来全身】妙法蓮華経の法に仏の全てが納まっていますという意味で書写するのであります。

歴代貫主の塔婆には、譬喩品第三（開結234p）の

唯我一人 能為救護

※当然、仏が唯我一人であって、歴代貫主が一人ではありません。こういう御経は歴代の塔婆に当てるから、貫主本仏の外道の感覚が生じるのであります。

上人・贈上人の塔婆には、壽量品第十六（開結509p）の

慧光照無量 壽命無数劫

※上人・贈上人程になれば慧光照無量の光源になれるのでしょうか？

大徳の塔婆には、壽量品第十六（開結507p）の

一心欲見佛 不自惜身命

※大徳位にならなければ、一心欲見佛 不自惜身命の修行をした事にならないのでしょうか？

一般御信者の塔婆には、上記法師品第十

此中已有 如来全身

畜類には、提婆達多品第十二（開結423p）の

皆遙見彼 竜女成仏

この様に、いつの時代からか何が目的なのか、意味が有るのか、わざわざ差別を付けていますが、悉有仏性と説き身分、家柄、肩書の名聞名利に執着してはいけないと説きながら、階級を亡くなった後まで兵隊の勲章の様に引きずり差別を付けるかのような愚劣な事は止めるべきであります。死んでまで、階級にこだわる神経は信仰者では無いと言えます。さて、この経文の中で、一番日蓮大聖人の法にふさわしい、妙法蓮華経の法の意味を明示している

のは【此中已有 如来全身】であると考えます。是非全ての塔婆の経文を、【此中已有 如来全身】に統一すべきであると思います。40年前に私はおかしいと感じ、それから全ての御塔婆に【此中已有 如来全身】と書写しています。

迹門と雖も、この経は、本門の意に通ずる法華経の目的が何を明確に示しているのではありません。舍利とは釈尊が自ら、自分が亡くなった後に、人々は釈尊に対する恋慕の念から唯一遺される私の遺骨を拝むようになるだろうが、それは意味の無い事だから、用いてはならない（舍利を安んずることを須いず）この妙法蓮華経の法の中にこそ、仏の全身が具わっているのです。

つまり、釈尊を信仰の対象の本尊として拝むのではなく、釈尊が悟り説いた妙法蓮華経の法を信仰の対象の本尊にしてください。妙法蓮華経の法の中に仏の全てが納まっているのだから。この様に示されているのであります。

又、宝塔品第十一（開結418p）にも、

（諸経の中で）此の経第一なり、若し（法を）能く持つこと有らんは、則ち仏身（成仏）を持つなり

又、観普賢菩薩行法経（開結688p）には、

此の経（法華経）を持つ者は、即ち仏身（成仏）を持するなりと、あります。

法華経は一切衆生成仏の法が説かれた唯一の法であります。その法華経の中に、この様に示されているという事は、人が法華経の行者として、自分の生命の根源を説く妙法蓮華経の法に叶い一箇に成った時【人法一箇】が成仏なのであるという事が明確に示されているのであります。つまり、成仏とは【人法一箇】なのであります。阿弥陀如来や大日如来や釈迦如来や薬師如来、観音菩薩、弥勒菩薩、地藏菩薩等々を信仰の対象本尊にして成仏させて下さい。と御願いしても、その仏の悟った法が何か分からなければ、【人法一箇】は出来ず、成仏出来ないのであります。自分の生命の外に有る、仏にすぎり【人仏一箇】しようとしても、自分の生命の根源である仏の生命、妙法蓮華経の法に自覚しなければ、成仏は出来ないのであります。仏は外に有るのではなく、内に有るのであります。

日蓮大聖人は、承久三年の承久の乱の翌年、承久四年二月十六日安房小湊片海に漁師の子として産まれます。幼少から十二歳で清澄寺に登るまで、世の中の権力闘争の矛盾や、あや

うさ、理不尽さを肌で感じながら成長します。両親は朝廷側に仕えていたために、承久の乱以後職を失い、にわか漁師の労働で糊口をしのぐ生活であったと推察されます。両親も、一人子の日蓮大聖人に漁師を家業として継がせる気など無く、どんな時代の混乱、権力闘争の混乱があっても、変質する事の無い、真実の法を見出し、その法を貫き生きて貰いたいと思い、出家の道を勧めたのだと思います。

この様な精神背景を持つ日蓮大聖人は、清澄寺の本尊である虚空蔵菩薩に、【日本第一の智者】とならせ給えと誓願を立てます。政教一致が当然の、この時代、宗教は必ず病気、食糧収穫、天変地異、そして覇権闘争に寄り添っていました。日蓮大聖人は、真実の法は一つのはずなのに、世の中に沢山の經典、各宗各派が有る、いったいどの經典が、どの宗派が本当に正しいのか、そして仏教の根本目的である一切衆生成仏の法はどこにあるのか、その事を見出す智慧を授けて貰いたいと誓願を立てたのであります。

この後、十六年、鎌倉、京都、高野、大阪、比叡山横川等々を遊学し三十二歳で、出家した清澄寺に戻り、遊学の日々を総括し、一切衆生成仏の法は法華經にしか説かれていない事を悟り、建長五年四月二十八日嵩が森の山頂より、太平洋から登る太陽に南無妙法蓮華經の題目を唱え、今日よりは、法華經の中に、今迄学び修行して来た他宗の教えが説く道理は全て納まっているので捨て、【法華經の行者として生きる事を誓われた】のであります。そして、自分を産み育ててくれた、恩徳有る、師匠、兄弟弟子、親、故郷の人々に対して、法華經の信仰によってのみ一切衆生成仏が叶うのであるとの、第一声を恩徳に報いる為に説き示すのであります。この時が【法華經の行者として生きる事を誓われた】法華經の行者として生きる旅立ちであります。清澄寺での説法の内容を聞きつけた、東条景信は即座に日蓮大聖人を殺害しようとしませんが、日蓮大聖人は道善房、兄弟弟子にかくまわれ、導かれ、危険をしのぎ鎌倉へ向かい、草庵を開き、鎌倉の人々に、清澄寺で故郷の人々に説いたと同じ様に、法華經の信仰によってのみ一切衆生成仏が叶うのである、幕府の肝煎りの禅宗も、世の中に広まっている真言、念仏も、成仏出来無いばかりか世の中を混乱に陥れ、決して安穩平安は得られない法である事を訴えて行くのであります。

正嘉の大地震によって起こった天下の混乱と乱れ、行き場のない飢饉疫病の塗炭の苦しみを目の当りにした日蓮大聖人は、出家者として一切衆生に一切衆生成仏の法を示さなければいけないとの責任と使命を感じ、この元凶は何かを文応元年七月十六日「立正安国論」に示し、眼に見えている苦しみに満ちた現実の世の中を事実として改正したいと考え、幕府の最高権力者を名乗る六代執権北条長時ではなく、隠棲してもなお黒幕として実質天下を動かす

ている北条時頼（最明寺入道）に宿屋左衛門を通じて提出するのであります。

この事が起因となり、弘長元年五月十二日40歳鎌倉幕府から伊豆伊東遠流の刑に処せられます。この時の事を、「四恩抄」（全936p）に、

行住坐臥に法華經を読み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受けて是れ程の悦びは何事か候べき。

と示され、法華經の行者として生きるという建長五年四月二十八日の立教開宗の誓いを貫き結実させ、王難を受けた事により、法華經の行者として生きる実行、自覚へと進んだのであります。一年九ヵ月の流罪が二月二十二日赦免となり鎌倉へ帰ると、日蓮大聖人は以前よりも多くの人々に幕府の政策の誤り、世の中に流布する念仏宗、真言宗、禅宗、律宗等々の宗教の謗法を市井の人々に説き歩くのであります。布教の日々を送るうちに、故郷の母が重篤である便りを受け、文永元年秋、故郷片海に帰郷します。法華經によって母の病氣平癒を御祈念し、母は、後四年の寿命を得る程恢復します。日蓮大聖人は母の為だけに帰郷したのでなく、十年前の建長五年四月二十八日以後、日蓮大聖人の法に帰依した故郷の人々に対して、手紙等で指導をしてきただけで、膝付き合わせて、法を説き、悩み、疑問に答える事が出来なかった為に、日蓮大聖人は精力的に村々の信徒の家々を訪ね歩くのであります。その事を聞きつけた、日蓮を殺そうと十年経過し、なを執念を燃やす地頭東条景信は日蓮大聖人と鏡忍房、乗観、長英の三人の一行が東条松原に差し掛かる時を狙って軍勢、念仏者と共に押し掛け、斬りかかり、馬上より刀を振り回し、日蓮大聖人は頭部を切られ、左腕を折られ、急を知って駆け付け日蓮大聖人を守護しようとした天津城主工藤吉隆と弟子鏡忍房はその場に斬殺され、乗観、長英も疵を被るのであります。

日蓮大聖人は「上野殿御返事」（全1555p）に、

抑々日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と、東条の難にはすぎず

と示され、法華經の行者として、見方によれば、龍ノ口法難よりも重い状況と言える。修羅と化し暴れ回る狂人の如き東条景信の刀から日蓮大聖人を庇おうとして、篤信の信徒と、寢食を共にして修行して来た弟子が血まみれになり息絶えて行く姿を目の当りにしなければならなかった日蓮大聖人の悲しみ、苦しみ、辛さ。寸での所で自身も惨殺されて不思議無い、生命に及ぶ大難であった事を示されている。

日蓮大聖人は、日に日に法華經の行者としての自覚が高まり、権力者と世の中に対して、各宗、各派の謗法を弟子、御信者を導きながら、共に高く広く訴えて行きます。その為、幕府は、世の中の人々が、日蓮の話聞き、幕府に公然と異論を唱える世論が喚起される事は、



幕府の威厳を損なうものと考え、法を施行し守らなければいけない当事者の幕府が、自ら法を破り、文永八年九月十二日平左衛門尉が軍勢を率い、松葉谷の草庵を襲い、逮捕し市中引き廻しの見せしめの晒し者にし、深夜まで北条宣時の邸に軟禁し、丑寅の刻、龍ノ口の処刑場に引っ立て、まさしく闇から闇に葬る暗殺斬首しようとしたのであります。斬首しようとした瞬間、江の島の方角から低い光跡で、真昼のように照らす火球が走り、平左衛門尉は幕府を始め自らへの崇りの兆候と考え暗殺を取り止めます。その後依智本間邸へ軟禁し、一カ月間連日、取り扱をどうするか結論の出ない鳩首会議が続きます。日蓮大聖人を殺したいけれども、幕府に崇りが及ぶことは避けたい事から、遠流の中でも一番重い佐渡流罪を申し渡し、佐渡の過酷な環境で悲嘆、衰弱、病死すれば、幕府が直接手を下して殺し崇りを被る事にはならないという牽強付会な方針を編み出したのであります。

日蓮大聖人は、この決定が出るまでの依智で初めて本尊を顕すのであります。この時までは、伊豆伊東流罪時に海に漂流していた釈尊像を身に帯、本尊として拝していたと言い伝えられています。当然、日蓮大聖人が釈尊を拝する事の意味は、法華経を説いた釈尊であり、世間一般の爾前経を説いていた時代も含む、釈尊であれば何でも良いという釈尊では無いのであります。しかし、この依智の時点まで、釈尊本尊で良しとしていたのであれば、あえて本尊を顕す必要は無いはずであります。、釈尊本尊では法が一切衆生に伝わらず、一切衆生成仏の道が不明確な為に、未曾有の独自の本尊を顕わさざるを得ない必要に迫られて顕したのであります。それは、釈尊像はもとより阿弥陀如来像、大日如来像、薬師如来像等々の本尊をどれだけ信じ拝んでいても、凡夫の釈尊はじめ、凡夫の諸仏諸菩薩が悟った法が何か、末法一切衆生、十界互具の荒凡夫が信の一念を立てる所に直接伝わらないし、悟れない為に、他宗の宗祖開祖と言われる誰もが考える事も顕す事が出来無い、南無妙法蓮華経の御題目を根本とする本尊を顕したのであります。仏に成仏させて貰うのではなく、釈尊始め一切の諸仏が成仏を遂げたと同様に、平等に一切衆生成仏出来る法そのものを信仰しなければ、一切の諸仏のように仏に成れないではないかと究極したのであります。

つまり、この時に、日蓮大聖人は妙法蓮華経の法と【人法一箇】する仏の自覚を得たのであり、合わせて、末法へ妙法蓮華経の法を弘通する為、法華経神力品第二十一において「我等仏の滅後、世尊分身所在の国土、滅度の処に於いて、当に此の経を説くべし」と、釈尊主体の信仰ではなく、釈尊が悟った妙法蓮華経の法を四菩薩、地涌の菩薩の代表である上行菩薩に結要付嘱したのであります。日蓮大聖人は、自分だけが、この上行菩薩の再誕である、天台大師も伝教大師も法華経に関する優れた経釈を表していても法華経の行者と

して生きた人は現在に至るまで、法華經を身で読んでいる者がいないとの自覚を認識するのであります。

この事は、法華經普賢菩薩勸發品第二十八に、  
如来の滅後に於いて、閻浮提の内に広く流布せしめて、斷絶せざらしめん。  
法華經の結經である、仏説觀普賢菩薩行法經に、

この大乘經典は諸仏の宝蔵なり。十方三世の諸仏の眼目なり。三世の諸の如来を出来生する種なり。此の經を持つ者は、即ち仏身を持、即ち仏事を行ずるなり。当に知るべし、是の人は即ち諸仏の所使なり。諸仏世尊の衣に覆われ、諸仏如来の眞実の法の子なり。汝大乘を行じて法種を斷たざれ。

このように、釈尊滅後は、釈尊を本尊として拝むのではなく、法華經の要、妙法蓮華經の法を南無（帰依帰命）する事を、釈尊自らが示しているのであります。

身延日蓮系の南無妙法蓮華經の御題目を唱える各派の人々が釈尊像を本尊とし、日蓮大聖人を日蓮大菩薩と解釈していますが、それこそが法華經の教示から外れる事でありまして、仏を本尊として拝むのではなく、仏の中味（悟った妙法蓮華經）の法を本尊としなければ、一切衆生成仏は無いのであります。

日蓮大聖人を本仏と拝するのは、釈尊像を本仏と拝するのと、どちらが偉いかと主張する様な同列ではありません。私達と同じ十界互具の凡夫である日蓮大聖人が法華經を身読し法華經の行者として生き、末法の一切衆生に一切衆生成仏の南無妙法蓮華經の法を説き示してくれた唯一の人であるから本仏と拝するのであります。釈尊は十界互具の凡夫仏ではありません。そして、釈尊は、法華經を説いても、法華經の行者として生き方は示していないのであります。本佛と解釈する基盤条件がまったく違うのであります。ですから、日蓮正宗の日蓮大聖人の御影様は常に柄の無い但薄墨の衣、白五条の袈裟で、身延日蓮宗系の金襴緞子の袈裟衣で着飾る事はしないのであります。どちらが眞實の引き倒しか、良く考えなければいけないのであります。

一方、日蓮正宗では、日蓮大聖人、日興上人の御影様を絵柄綾織、紋無しの但薄墨の衣、白五条の袈裟の御姿に作られながら、僧侶達は僧階により絵柄綾織の袈裟衣を着しているのであります。どちらも間違っているのであります。

日蓮大聖人は、久遠元初、本因妙から本佛であるから、生まれる前から仏であったと主張する人々がいます。そういう人達は承久四年二月十六日は本仏日蓮大聖人が生まれた日だと言います。おぎゃあおぎゃあと泣き、おしめを換えて貰い、おっぱいを飲ませてもらい、ど

うして本仏として一切の衆生に法を説くのでしょうか？本佛なら、どうして法華經の行者にならなければいけないのでしょうか？何故、虚空蔵菩薩を拝まなければいけないのでしょうか？どうして初めから法難を受けずに南無妙法蓮華經の本尊を躓さないのでしょうか？生命に及ぶ法難の日々は狂言回しのやらせの演出だというのでしょうか？

日蓮大聖人は、一切衆生に一切衆生成仏の手本を示した本佛であります。初めから本佛である必要は無いのであります。初めから本佛であるならば、本因妙の本佛でなく、釈尊と同じ本果妙の迹仏という事になってしまいます。

ここまでが、何故日蓮大聖人が【人法一箇】かという説明になります。

### 【師弟一箇】

【師弟一箇】とは、一切衆生成仏の法を求め、悟り、法華經の行者として信・行・学・折伏に生きる師匠と、未だ途上の弟子が一体となる事であります。一体となると言っても身体は別々ですから肉体の一体は当然不可能です。心の一体も、それぞれの心はそれぞれのものですし、師匠の法華經の行者としての生き方には至っていませんから、同一の心になる事は有り得ません。それでは何が一体かと言えば、師弟共に妙法蓮華經の仏性の絶対平等の同一性を確認自覚しあい、師弟共に成仏するという事を【師弟一箇】と言うのであります。

そして、【師】は【弟子】より先んじて【人法一箇】し、末法の本仏を自覚し、後に一切衆生成仏の手本を【弟子】に示す、日蓮大聖人の存在であります。【弟】とは弟子であり、日蓮大聖人に教化され、日蓮大聖人と同じ法華經の行者として生きる姿の中に成仏を見出す人々を言います。つまり、【人法一箇】した日蓮大聖人が、弟子に【人法一箇】の道を説き伝え、弟子が信・行・学・折伏として実行して、師匠と同じ、妙法蓮華經の仏と成る事が【師弟一箇】なのであります。

例えば、【人法一箇】の項で示したように、私達は引力に叶って生きています。ニュートンが万有引力の法則を発見する前から引力は本然として有りました。仮に、ニュートンを仏、世界の人々を弟子、衆生とします。万有引力の法をニュートンは誰に教えて貰う事も出来ない為に、自分で、もがき苦しみ、発見しました。仏で言えば、自解仏乗であります。当然ニュートンが引力を作ったのではなく、引力は元々本然として有った道理であります。誰もが引力の中で生きながら、何も考えもせず、疑問も持たず、リンゴが落ちるのは当たり前だと思っていたのであります。ニュートンが万有引力の法則を発見した後は、世界中の人々

誰もが、ニュートンの様に万有引力の法則をもがき苦しみ発見する能力は無いし、その事を不思議だとも探究しようとも思わない人がほとんどでしょう。しかし、ニュートンの万有引力の法則の方程式によって、世界的に科学は拡大発展したのであります。万有引力が何か分からない人々も、その恩恵に浴しているのです。この様な相関関係が【師弟一箇】の関係になるのであります。

もっと身近な例で言えば、子供が学校で勉強するうちに先生に憧れて先生になりたいと夢を抱く、子供に学問を分かり易く教え導く事の出来る先生になるには、他人より勉強をし努力しなければいけない。学力も人一倍養い、教えるむつかしさと、教えられる子供の心も勉強し経験し、人間として人格、道徳、多角的な視点も養わなければいけない。色々な困難を乗り越えて先生になる。先生（仏）も、元々子供であり生徒（凡夫）だった、その子供（凡夫）が先生（仏）に導かれて先生（仏）になる。双方の根本に妙法蓮華經の法が存在するのであります。

仏法の根幹を成す、【仏・法・僧】の三寶も、次第に準じて並べれば、【法・仏・僧】となります。神や仏が創造したもので無く、森羅万象に本然として永遠常住に具わっている【法】を仏になる前の凡夫が悟り【仏】となり、その【法】を、次代の【僧】に伝える。【法】と凡夫が【人法一箇】し【仏】となり、【仏】と【僧】が【師弟一箇】してこそ、仏法は机上の論でなく、森羅万象に必要な生き活きとした、十界互具の生命のまま生老病死を乗り越える勇気を持った、生命の法と成り、一切衆生成仏の法となるのであります。

日蓮大聖人が【人法一箇】として本佛としての悟りを得、その法を弟子に説き伝え、弟子が【師弟一箇】して同じ【人法一箇】の成仏を得る。【人法一箇】と【師弟一箇】は名称と、接近の方法は違いますが、【妙法蓮華經の仏】という、一切衆生成仏の点に於いて、異名同意なのであります。

創価学会や世間で言う様な、師弟とは、まったく意味、次元が違うのであります。

日蓮大聖人は佐渡流罪の刑を、文永8年（1271）10月28日から文永11年（1274）2月14日迄在島2年半の生活を送り、赦免となり鎌倉へ帰ります。幕府は日蓮大聖人が衰弱し死んでくれることを願っていたにもかかわらず、日蓮大聖人の指摘が次々と符合して行く為、疑心暗鬼となり、日蓮大聖人が蒙古と通じているのではないかと考え、日蓮大聖人に直接問い質そうと赦免にしたのであります。幕府に客分として招かれ、蒙古がいつ襲って来るかと尋ねられますが、日蓮大聖人は、法華經に蒙古襲来の日付が書いてあるわけではない。しかし、今

迄の自界叛逆の経緯から見て、他国侵逼は今年来年の内には間違いがない事を伝えると同時に、いつ襲来するかよりも、文応元年、立正安国論で訴えてから今日まで一貫して折伏してきたように、幕府自身が法華経の信仰に目覚めなければ、如何なる手を打っても、現在の混乱を納める事は出来ない。と、三度目の高名（国家諫暁）を行います。しかし、幕府は蒙古襲来の時期にしか興味を示さない為、日蓮大聖人は、天下人は一番に天下の平和安寧を願い求める責務を果たしてこそ天下人であるのに、一族、自分の権勢と繁栄しか考えていない。今迄、天下人が法華経の信仰に目覚め改心する事によって万民が目覚め改心すると、国家諫暁してきたが、天下人の器ではなかった事を確認し、国を為す一人一人の人々の心に南無妙法蓮華経の信仰を建立していかなければ、この国は本当に駄目になってしまうと考え、佐渡よりも環境の厳しい身延の山に籠り、遠地から過酷な旅路を越えて法を求めて来る弟子や御信者であれば、必ず法を古里の地へ持ち帰り間違いなく流布してくれるはずだと考えたのであります。六老僧が中心となり、各師縁故の地域に、これからは日蓮大聖人のいる身延を中心に法を求め信仰する様に伝え歩きます。

走湯山にて出家していた日目上人には、南条家の折伏によって改宗していた両親の懇願から、富士方面の信徒を訪ね歩いていた日興上人が訪ね、日目上人を折伏し、走湯山一の十宗兼学の学僧式部僧都との法論になります。日目上人は、これを目の当りにし、日興上人の、十宗の中に於いて、如何なる法が一番正しいのかの問いに、返答できず苦悶する式部僧都の姿を見た時に、此処にいて真実の法を求める事は出来ない事を理解し、日興上人に進められ山を下り、身延の日蓮大聖人の下で改心し、信・行・学に励み、同時に日蓮大聖人が亡くなられるまで常随給仕の修行にいそしみ、かつ、兄弟弟子や身延に法を求めやって来て逗留して行く御信者さんの世話の取り計らいに勤めたのであります。

日蓮大聖人が八ヶ年一度も身延山を出る事が無かったのは、「三度国を諫めて用いざれば山林にまじわるべし」との教えだけでなく、佐渡赦免になって無罪放免になったにもかかわらず、幕府は執拗に日蓮大聖人の法を信仰する者への監視、弾圧、嫌がらせを続けていたのであります。その為、日蓮大聖人が身延山から下りれば、御信者さんの中に必ず想像を絶する混乱を呼ぶ事を考え、下りる事をしなかったのであります。しかし、篤信者が折伏弘教をする事により、必ず世間に摩擦を生じる事は当然の事であり、その最大の難が、熱原の法難であります。

熱原法難は、遠くは日興上人が四十九院に於いて出家し、同じ天台宗の実相寺で、立正安国論の下調べと草案の為に寄宿されていた日蓮大聖人の警咳に触れ、共感し、天台宗の僧侶

でいる事を反省し、出奔し、日蓮大聖人の元で出家し直すのであります。しかし、日興上人の様な行動が取れ無い人々は四十九院、実相寺に残って、日興上人からの便りを抛り所にして日蓮大聖人の法を信仰して行くのであります。この人々が、正嘉二年（1258）から、富士地域の一粒種となり、信仰が根強く伝播されていくのであります。

建治元年（1275）

日興教化によって熱原龍泉寺、下野房日秀、越後房日弁、少輔房日禅、三河房頼円、在家信者多数帰依。龍泉寺大衆多数の改宗により、迫害が始まる。熱原法難の顕在化の始まり。

建治二年（1276）

龍泉寺院主代行智、下野房日秀、越後房日弁、少輔房日禅、三河房頼円に称名念仏の誓状提出を求める。頼円は受諾。これより日禅は河合に移り、日秀、日弁は寺中に居座り弘教を続ける。

弘安二年（1279）4月8日

熱原信徒、四郎、浅間神社分社にて暴漢に襲われ傷害を受ける。

同年8月

熱原信徒、八四郎、暴漢に襲われ殺害される。

同年9月21日

熱原信徒、院主の田の稲刈りをし盗んだとの事実無根の内容の告訴状を作り神四郎、弥五郎、弥次郎はじめ20人を捕縛し鎌倉へ連行、土牢に入れる。

同年10月1日

【聖人御難事】に於いて、出世の本懐（宗旨建立）を明示する。

同年10月12日

伝、戒壇本尊顕す。

同年10月15日

神四郎、弥五郎、弥次郎を裁きにかけることもなく、平左衛門尉頼綱の私邸において、法華経の信仰を止め、念仏を唱えれば、命を助けてやると迫り、藁目矢で狙い撃ちし骨を打ち砕く拷問の末、南無妙法蓮華経の唱題を貫き、神四郎、弥五郎、弥次郎は殺害され、17人は処払い、浪々の身とされる。

熱原法難に関連する項目を年表から抜き出して並べて見ると、明らかに熱原法難は弘安二年だけに突発的に起きたもので無く、長年にわたり、日蓮大聖人の法を信仰する人々を根

絶やしにしようとする幕府と地域各宗の執念の結果、起きた法難なのであります。

一切の諸仏諸菩薩の願目は【一切衆生成仏】であります。一切の經典の究極の目的も【一切衆生成仏】であります。

本佛日蓮大聖人の願目も当然【一切衆生成仏】であります。日蓮大聖人が【人法一箇】して上行菩薩の自覚と本仏の自覚を得たのは龍ノ口の法難であります。しかし、仏は自分だけの成仏で満足し終わったならば仏としての責任と使命を果たしたことにはなりません。つまり、一切衆生に一切衆生成仏の法を説き伝えてこそ仏なのであります。それが出来ない仏は迹仏、権仏であり、本仏ではないのであります。

弘安二年10月1日【聖人御難事】に、  
去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に安房の国長狭郡の内東条の郷今は郡なり、天照太神の御厨右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり、仏は四十余年（九横の大難を経て、「四十余年未顕真実」として法華經を説く事）・天台大師は三十余年（南三北七と敵対破折し法華一乗を示す）・伝教大師は二十余年（南都六宗と敵対破折し法華經迹門の戒壇堂を建立）に出世の本懐を遂げ給う、其の中の大難申す計りなし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各かつしろしめせり。

と示し、釈尊の出世の本懐、天台大師の出世の本懐、伝教大師の出世の本懐、と併記し、日蓮は二十七年掛けて、今此処に出世の本懐（宗旨建立）を宣言する。と、示されているのであります。つまり、日蓮の出世の本懐は、釈尊とも、天台とも、伝教とも違うものであるという事を宣言しているのであります。釈尊を本尊に仰ぎ、日蓮大聖人を大菩薩と拝す人々では、解釈不能になってしまうのであります。

同書に、

彼の熱原の愚痴の者ども言い励ましてをどすことなかれ、彼等にはただ一えんにおもい切れよからんは不思議わるからんは一定とをもへ、

と示されている事から、弘安二年9月21日熱原農民の捕縛、連行、土牢入獄に対して書かれた手紙である事が分かります。

日蓮大聖人が、この状況を【出世の本懐（宗旨建立）】と、された事は、日蓮大聖人と生まれも育ちも、出家在家の違いも、修行も、経験も、学問も、数々の受難も、全く違うにも

かかわらず、同じ法華經の行者としての生き方を貫き、妙法蓮華經の仏性を抱く事に於いて同等であることを示している事を身延に於いて見聞し、師弟一箇、一切衆生成仏を確認確信するのであります。入信して一、二年の初信の人々。小作人として自由な言動が出来ない貧しく卑屈な生活の中で、創価学会の様な、病気が治る、御金が儲かる、悩みが無くなるといった現世利益の折伏と言えない様な勧誘で入信したのでなく、本物の折伏、森羅万象全て生命に仏の生命が具わり、法華經の行者として生きる事によって、誰もが必ず成仏出来るという、本当の日蓮大聖人の法に縁する本物の折伏によって、日蓮大聖人の法に共感し、それまでの信仰を止め、この理不尽な世の中であって、永遠常住の生命に目覚めたが故に、死の恐怖に立ち向かう事が出来たのであります。

日蓮大聖人はこの熱原農民の刻々の姿を報告の手紙で知り、熱原農民がこの様に日蓮と同じ法華經の行者として生きる事が出来るという事は、全ての一切衆生もそのように生きる事が出来る可能性を持っている事であるとの確証を得て、一切衆生の成仏を確認確信し、日蓮大聖人が龍ノ口で悟った妙法蓮華經の法を熱原農民が同等に悟った事により、

【人法一箇】日蓮大聖人の末法本佛の自覚

【師弟一箇】一切衆生成仏の確信、

の二つが揃い、初めて、仏の使命と責任と願目と、衆生の願目である【一切衆生成仏】の法、久遠元初、本因妙、一念三千の未曾有の法が事実として、末法は一切衆生に示す事が出来る様に完成したのであります。故に、

余は二十七年なり

と宗旨の建立を明示されたのであります。

熱原の農民が殺される恐怖と闘いながら、法華經の行者として生きている最中に、戒壇本尊が顕される10月12日以前に、日蓮大聖人の【人法一箇】と【師弟一箇】が一つになった

【宗旨建立】が成されているのであります。

我々が信仰する全ての本尊の中味、日蓮大聖人が一切衆生に伝えようとしたものは、この事なのであります。